

カラスの生態と対策

農作物に被害を及ぼすのは、ハシブトカラスとハシボソカラスの2種類で、鳥類の中ではもっとも大きな被害をもたらします。何でも食べるため、被害は野菜から果樹、イネモミ、飼料作物までほとんどの農作物に及びます。

生態

食性 農作物全般を食害するほか、バッタ類やコガネムシ、ハエなどの昆虫類をよく食べます。魚介類、ヘビ、カエル、ネズミなどの死体、残飯なども食べ、「掃除屋」との異名もあります。ヒナにエサを与える春は、播種・発芽期のダイズやトウモロコシを狙います。

行動 カラスはもともと人の営みにつかず離れず生きてきた鳥です。したがって、エサを得るために道具を使いこなすなど、人のそばで生き抜くための賢さを備えています。しかも、天敵はいないに等しく、卵やヒナを除くと猛禽類でもカラスを襲うことほとんどありません。

繁殖 繁殖期は3月～6月半ばまでで、3～6個の卵を産み、幼鳥は9月頃までには巣立ちます。生後2～3年以上たないと繁殖に参加できません。夏から秋、冬へと移行するにつれてねぐらは大きくなり、冬は数千～数万羽にもなります。自然界での寿命は8～9年といわれます。



困った!

カラスによる被害が拡大

ゴミを散らかす、畑を荒らす、人を襲うなど、カラスによる被害が大きな問題になっています。何でも食べ、記憶力、身体能力、知恵に優れているカラスは、新たな被害を生みだす困った存在です。近年では、次のような被害も増えてきました。

▶ビニールハウスを破る

ビニールハウスのなかにエサとなるものがあると、鋭いクチバシでビニールハウスを破るようになることがあります。農家にとっては、ビニールハウスが破られた上に、作物を食べられてしまうため、二重の被害が生じます。

▶家畜の被害

畜産農家では、ウシやブタなどの家畜が襲われる被害が出ています。カラスに何度も突かれ、傷を負う子ウシや子ブタもいます。養鶏場では、ニワトリのヒナがカラスに襲われたり、卵が盗まれたりする被害が出ています。

家畜の飼料も、カラスにとってはごちそうです。ウシやブタが食べている飼料を横取りしたり、飼料の袋を破って食べることもあります。



被害防止のためのワンポイント・アドバイス

1 知らずに行っている餌付けをなくす

エサへのこだわりがなく、なんでも食べるので、農家の屋敷まわりや集落はカラスにとってエサの宝庫となります。知らず知らずに行っている無意識の餌付け(生ゴミや放置された野菜クズ、取り残し果実、ドッグフードの食べ残しなど)をカラスの目線でチェックしてみましょう。

2 あきらめずカラスの「慣れ」を防ぐ

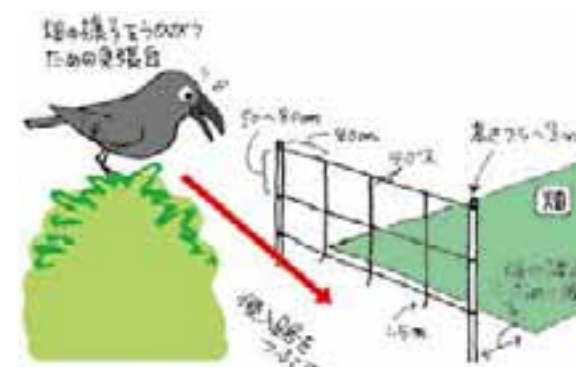
防鳥テープや爆音器、カラスの死体や模型、黒ビニールなど、カラスを追いやるさまざまな方法が試されてきました。一時的には効果を発揮するものの、頭のいいカラスはすぐに慣れてしまいます。その「慣れ」を防ぐのがカラス防除のポイントです。道具を複合的に組み合わせる、効かなくなったら片付け、別の道具をセットするなど、手を緩めないようにしましょう。



3 テグスや防鳥ネットで防ぐ

カラスは畑を狙う際に様子を伺う見張り台のようなところに入ったん止まって、安全かどうか、回りの様子を確認してから侵入します。そこで、侵入路をつぶすようにテグスを張る、畑の隅まで広めに張るといった工夫も効果的です。畑全面をテグスで覆わなくてもしばらくの間カラスは恐怖心を持つようになります。

また、経費はかかりますが、もっとも効果が確実なのは防鳥ネットを張ることです。食い破られないように丈夫なものを選び、たるませない、すき間を作らせない、農作物から離すなどの点に注意して設置しましょう。



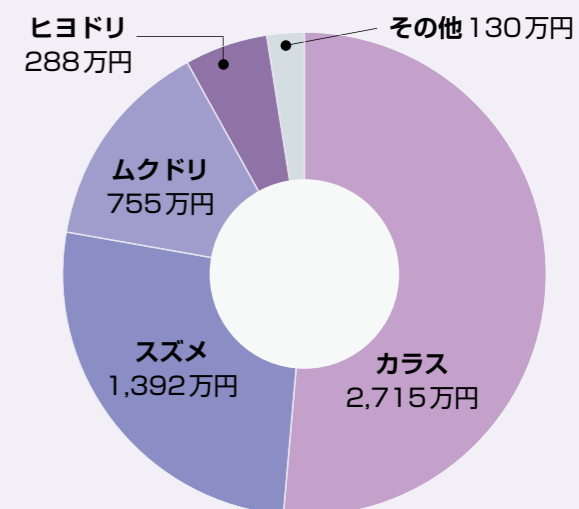
まず侵入路をつぶす

県内のカラス被害

平成21年度の富山県における農産物被害の鳥類割合は、カラスが1位(被害額2,715万円)となり、鳥類全体の約52%を占めています。

そのうち、最も被害が大きいのは稲で、被害額は1,228万円にも上ります。次いで、果樹の被害額は1,135万円です。稲は主に踏み荒らし、果樹は食害と、被害の種類は異なります。それぞれに合った対策を考え、実施しましょう。

県内農作物被害の鳥類割合



(平成21年 富山県農産食品課)